

◎心地よもの

秋の郊外、瑞穂垂る、田つら、うまし實結ぶ林、大自然の御手に招けるまをほのすき、小宇宙の心さ清き野菊の花立田乙女の手すまびよ、まして、この自然の心と解け合ふ我等一行、我等が自然を歩けるか、自然が我等にまつばりたるか、あしげし味ふ無我の境、その我ふき境、より徐々に覺め行く刹那刹那、よに心地よきもの、限ふれ。夏の夕、巷の塵も静りて都ながらもさすがに静けし、今し食後のそらありき、吹く風軽く袂を吹きて、清き氣重く頭にしみて。寢臺の敷布の白う揃ひて亂れざる回轉窓の同じ角度に開かれたる、飯臺の蠅よけの正しく口筒状に積まれたる。布巾の白き、蚊帳の青き、雑巾のさし目正しき。一時間の髪業に頭少し重なりたる頃しも窓押し開き、清き風のらうたき風情にて音なひ來たる。教几の花の取りかへられたる。取りかへしペンの書きよき。手水鉢の水のなみくこ入りたる、ここに水杓の位置の正しき。湯船の湯の濁らざる、なほわたへの桶の整然たる。清めし硯おぼるげならぬ覺束なささへ少しかくさる、心地して。洗ひ髪、絹の絲をまさぐるが手すれの心地煩のあたりに散りたへよの常ならず。冷水摩擦の後。洗濯襦袢着る前。王霸なき華背のたし中。(野菊)

\* \* \* \* \*

雜報

◎本會記事

去る九月二十三日午後一時より第二十一回文科會(臨時會)を講堂にて開く。元來文科會は大抵一學期一回づ、開會の豫定なりしも本學期は他の學期よりも長へ且つ夏休み中に研究經驗せしこともあるべければ各級の有志者をして自由にその研究經驗につきて獨特の思想を發表せしむるために臨時に開きたり。當日は校長中川先生教授關根、下田兩先生及小此木先生をはじめ二階堂、早川、中村(愛子)落合(とよ)諸氏來臨せらる、講演順序は左の如し

- 一、英文學につきて 小此木先生
二、西行法師 文一 多田しめよ
三、朝鮮に於る我が印象文二 金田 まき
四、詩に現はれたる楊子江 文三 澤口 やす

紹介

◎新刊歴史參考書目紹介

下村三四吉

本誌編輯委員の方から歴史參考書の事に付て寄稿してくれよとの御依頼があつたが全体の事は別に他日に期しこゝには只此の七八月頃發行せられた新刊書類部をあげて簡単な紹介をして其責を塞ぐ事とする、
一、日本現代史綱(増澤長吉著)全一冊
著者は京都府女子師範學校の教諭である。本書は嘉永六年米國使節來朝後約六十年間に起つた重要な事蹟を記述してある。全篇に分け第一篇は維新前記で明治維新の完成で終り第二篇は明治維新以後立憲政治の確定まで第三篇は帝國議會後日露戰役まで第四篇は日露戰役の外交より韓國の併合に及んで終て居る。卷末に、内閣更迭表、年表等數篇の附録を添へ、外に空白の幾頁が加へてある。重要な事

◎講堂訓話

五、初刊の青箱を讀みて 文四 稻葉 みつ
十月卅一日午後〇時五十分より本校職員生徒一同講堂に參集し中川校長左の訓令を朗讀せられ將來國家教育の任に當らんとする者は益努力奮勵以て聖旨に副ひ奉るべきを懇々訓諭せられたり

文部省訓令第十八號
十月三十日

天皇陛下の御名代として 皇太子殿下東京高等師範學校に行啓あらせられ其際本大臣に左の御沙汰を傳へさせ給へり

健全なる國民の養成は普通教育の振興に俟つ其局に當る者益々勵精せよ

本大臣は此の優渥なる 聖旨を拜し感激措く所を知らず謹で之を全國一般に告知す普通教育の局に當る者須らく鞠躬盡瘁益々教育の實績を擧げ以て聖意に答へ奉らんとを期すべし
明治四十四年十月三十一日
文部大臣長谷場純孝